

令和元年6月24日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16834

研究課題名(和文)ダイクシスの認識に関する日仏対照研究

研究課題名(英文)A contrastive study on the cognition of deixis in Japanese and French

研究代表者

守田 貴弘(Morita, Takahiro)

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：00588238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：「行く」「来る」のような話し手の視点の表現は日本語で頻度が高く、フランス語では低いという傾向がある。本研究ではその要因が言語構造による制約なのか認識的なものなのかを明らかにするため、ジェスチャーも分析対象とした発話実験を行った。その結果、フランス語話者は言語では視点を表現しないのに対し、ジェスチャーでは表現することが明らかとなったため、言語表現の頻度は構造的な制約だと考えられる。他方、話し手に中立的な移動方向でも日本語話者が視点を表現することがあるのに対し、フランス語話者はそのような視点をいかなる手段でも表現しない。話し手領域の決定に言語が関係している可能性があることを示す結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語が思考を形成する、思考は言語を使ってなされるという見方は広く受け入れられているが、その思考とはどのようなものであり、言語と思考がどこまで不可分のものなのかという問題については十分に明らかになっていない。本研究では、空間移動に関する情報を知覚的に把握するときに、話し手が知覚した内容といかなる関係を構築するのかという観点に絞って思考内容を分析することにより、「言語が思考を決定する」といった極端な主張を退けることが可能となった。他方では、話し手による自己の領域の範囲が言語によって異なる可能性のあることを示すこととなった。

研究成果の概要(英文)：Previous studies have shown that verbs of coming and going (deictic verbs) are more frequent in Japanese than in French. The present study aims to know whether this distribution is linguistically constrained or epistemically motivated, and it analyzed not only linguistic expressions but also gestures elicited by video clips. One major finding is that French speakers did not frequently use deictic verbs, while they expressed deixis by gestures; as a result, the low frequency of linguistic deictic expressions is constrained by the French linguistic structure. On the other hand, it is revealed that Japanese speakers used deictic verbs even for neutral directions with respect to the speaker's position, while French speakers did not express this type of deixis neither by language nor by gestures. This result suggests that languages have influence on the determination of speaker's territory.

研究分野：言語学

キーワード：移動表現 ダイクシス ジェスチャー 日本語 フランス語

1. 研究開始当初の背景

移動表現の類型論において、日本語とフランス語は移動の経路を動詞で表現するという点において同じ類型に分類されてきた。その一方で、報告者の過去の研究により、経路の構成要素とされるダイクシスについては、日本語の方がフランス語よりも圧倒的に表現頻度が高く、表現方法としても動詞を用いる日本語に対して、代名詞を伴う前置詞句を使うフランス語という規則的な相違があることが明らかになっていた。

この分布および表現方法の違いを説明するために、単純に認知言語学的な視点を導入するならば、言語表現の違いは認識の違いを反映していることになる。その結果、話者の視点が含まれるダイクシスについても、日本語話者とフランス語話者の自己の領域に関する認識の違いを反映している、あるいは、主観的事態把握や客観的事態把握という名のもとで説明される事態認識の違いを反映していると考えられることになる。しかし、日本語はダイクシス動詞を含んだ複雑述語が使えるのに対し、フランス語ではそれができないという、言語構造上の制約に由来する可能性も排除できないため、言語表現上の相違が本当に認識上の違いに由来するものなのかどうかを決定することができないという問題があった。この問題にアプローチするためには言語表現以外の思考/認識の表現方法も考慮に入れる必要があると考えられたため、言語と同時に産出されるジェスチャー表現のような、言語以外の思考/認識の表出方法にも着目する必要があった。

さらに、類型論の理論的側面としても、ダイクシスは経路の一部であると従来は考えられてきたのに対し、報告者も含めた日本の研究グループを中心として、ダイクシスを他の経路とは独立した意味要素として分析する研究もあり、その理論的位置づけが不明確なまま残っているという問題もあった。ダイクシスを他の経路と区別するのであれば、類型論の全体像がどうなのかという議論が必要になるはずだが、そのような議論はなされていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は大きく3つある。1つは、言語とジェスチャーによる移動表現の描写に関する対照言語学的な記述である。現状の認知言語学では、前述のように、ダイクシス表現の頻度の違いは話し手による事態把握の違いとして説明される。しかしフランス語では、様態や経路といった移動を構成するその他の意味とダイクシスを同時に表現しにくいという構造上の制約があるため、表現上の違いをただちに認識の相違に帰するわけにはいかない。また、複合動詞を持たないフランス語では、動詞で表現できない要素が副詞や前置詞句といったその他の手段で表現されることもあり、その表現方法の違いを直接的に認識の問題として説明することには、言語決定論を引き起こすという問題があると考えられる。そこで本研究では、非言語的な認識の表現手段としてジェスチャーも記述対象に含めた上で、言語表現がどこまで話し手の認識を反映しているのかを明らかにすることを目的とした。たとえば、一方の言語では表現され、他方の言語では表現されない視覚情報であっても、ジェスチャーでは両方の言語で等しく表現されることが確認されれば、言語表現の異なりほどには認識上の差がないことを示すことができると考えられる。表出された言語表現やジェスチャー表現だけを観察するだけでは認識そのものに迫ることはできないという原理的な限界はあるものの、以下に説明する理論面にかかわる研究目的の基礎として、この記述的研究を完成させることを第一の目的とした。

目的の2つ目は、現状の移動表現の類型論に対する理論的貢献である。この類型論において、ダイクシスは話し手が起点あるいは着点に位置しているときの特殊なケースに過ぎず、意味的には経路を構成する一要素だと考えられてきた。つまり、移動物 (figure)、基準物 (ground)、移動の事実 (motion)、経路 (path)、そして様態 (manner) という移動事象を構成する概念のうち、ダイクシスには考慮すべき独特の意味はなく、独立した位置づけは不要であるという見方である。その一方で、言語によってはダイクシスを表現する専用の表現位置を備えていることがあり、他の経路とは区別して表現されることもあるといった事実に基づいて、独立の意味要素として扱う先行研究もある。このように、ダイクシスはその類型論的位置づけが不明確であり、その扱い方がもたらす理論への影響は十分に議論されているとは言えない。たとえば、日本語においてどこかに入る移動を表すときに「～に入っていく/来る」というとき、ダイクシスが経路の一部であれば、日本語は経路を主動詞で表すという従来の見方が有効であるのに対し、経路からは独立した意味だとするならば、日本語は経路が従属動詞で表される言語ということになり、類型が変わってしまう。類型論全体のことを考えずにダイクシスに特化した研究を行うことも可能ではあるが、経路概念からダイクシスを切り離すことで類型がより複雑化することは自明であるため、ダイクシスを独立した意味要素として認めることの妥当性を問うことで、ダイクシスの位置づけを決定しなければならないという理論的要請があると考えられる。

最後に、本研究は認知言語学に対する方法論的貢献も目的に含んでいる。上述のように、認知言語学では言語表現と認識が等価であるかのような説明がなされることが多いのに対し、言語表現は認識の一部であり、表現の違いが認識の違いに直結しない可能性があるということとは積極的に議論されていない。本研究は、ジェスチャーによる話し手の認識の表出も分析することにより、言語表現の違いと認識の違いを同一視する方法論を洗練させるという目的も備えている。これにより、すべての言語表現上の違いを説明するために認識の違いを持ち出すのではなく、認識に及ぶ言語表現上の違いとしてどのようなものがあり、認識に及ばないものにはどのようなものがあるのかという基準に関して、何らかの提案をすることが可能になると考えら

れる。

3. 研究の方法

本研究では、空間移動に関する実験ビデオを被験者に見せ、その様子がどのように言語化され、どのようにジェスチャーで表現されるのかを分析した。実験にあたっては、ジェスチャーの産出を促すため、ジェスチャーを使っても構わないことを伝えた上で、2人1組で実験を行い、1名には実験映像を見せ、映像を見ていないもう1人の参加者に、映像内容を説明してもらうという方法を採用した。映像を見ていない参加者に対しては、ビデオクリップのセットにはいくつかの類似した映像が含まれるため、それらを区別できないときには質問をし、より詳細な説明を求めるように指示した。

実験は、フランス語話者に対しては2016年にフランスにおいて20組40人を対象に行い、日本語話者に対しては2017年から2018年にかけて10組20人を対象に行った。実験映像は、移動物、基準物、経路、様態および方向を変数とする組み合わせにより構成された、過去の研究で用いた映像(報告者も参画していた国立国語研究所共同研究プロジェクト内で作成)を再構成して利用した。

本実験で用いたデータセットは52のビデオクリップで構成した。ダイクシス表現に影響を与えるのは方向の相違だが、基準物がどのようなものであるのかという点も影響を与えることが予想される。そのため、本研究では、方向だけではなく、基準物の形状等も変数に加えて調査した。以下にその例を示す。

- ・開放空間における方向の違い：方向だけを問題とするクリップ。
- ・同じ3次元空間における方向の違い：3次元の閉鎖空間があるときに話し手に中立的な移動が「行く」と「来る」のどちらで表現されるか。
- ・階段を下りる状況における方向の違い：話し手に向かう移動だけではなく、同じ高さを共有する移動も「来る」で表現されるかどうか。
- ・ケージから犬が出る/入るときの方向の違い：話し手に近づくか離れるかだけではなく、視界に現れるか視界から消えるかがどのように表現に影響を与えるか。
- ・同じ移動における定点映像と追跡映像の違い：定点映像に移動物が入ってくると、移動物の移動を追跡する場合で表現に違いがあるかどうか。

これらの変数を制御することにより、移動方向が中立的な場合にダイクシス動詞が使われたときにも、どのような視覚情報がその使用を支えているのかを特定することができる。

録音・録画したデータは移動に関する言語表現を抽出して書き起こし、該当部分のジェスチャーを記述して分析に用いた。描写された空間移動の情報のうち、経路や様態は本研究では分析対象から除外してダイクシスに焦点を絞り、言語で表現されたダイクシスとジェスチャーによって表現されたダイクシスを特定し、2つの表現モダリティで情報が一致しているかどうか、さらに、日本語話者とフランス語話者で表現が一致しているかどうかという観点から分析を行った。

分析の焦点は主に3点あった。1つは、日本語話者において「話し手から離れる」あるいは「話し手に近づく」という話者関与的な状況だけではなく、話し手に中立的な横方向の移動において、「行く」や「来る」といった表現がいかに使われ、それに伴うジェスチャーが何を表現しているのかという点である。2点目は、中立的な移動では使うことが難しいことが予想されるフランス語のallerやvenirが実際に使われるかどうかの検証であり、最後は、日本語話者であればダイクシス動詞を用いて表現する情報を、フランス語話者が言語で表現していないとき、ジェスチャーで関連する情報が表現されているかどうかを調査することである。

4. 研究成果

本研究の主たる成果は3点にまとめることができる。1つ目は、空間移動を描写するときのジェスチャーの主要機能を特定したことにある。ジェスチャーの基本機能について先行研究においては統一見解があるとは言えず、移動表現に関しても、(1)ジェスチャーは言語による思考の表出を促す(ジェスチャー先行)、(2)ジェスチャーは言語表現に付随する(言語先行)、あるいは(3)言語で表現されない情報をジェスチャーが補う(言語とジェスチャーが独立し、思考内容をどちらかが表現する)といった、さまざまな機能が提唱されている。本研究の結果によると、話し手から離れる、話し手に近づくといった話者の位置が関与する典型的なダイクシスについて、フランス語話者の分析においては(3)の機能が顕著に認められるのに対し、中立的な移動における日本語話者とフランス語話者の比較においては、(2)の機能が非常に重要であることが示された。

言語表現のみを比べると、日本語ではダイクシス表現が非常に多いのに対し、フランス語では少ないことが以前の研究から分かっていた。これをもって、フランス語では移動を構成するその他の情報よりダイクシスが認知的にも優先されないと考えられることもあった。しかし本研究の結果、話し手から離れる、話し手に近づくといった話者関与的な状況の描写において、フランス語話者はダイクシス情報を含まない言語表現を使いながら、ダイクシスに関してはジェスチャーで表現することが多いことが明らかとなった。具体的には、日本語では「入って行く/来る」「出て行く/来る」といった表現の違いが観察される状況について、フランス語ではentrer(enter)、sortir(exit)という経路のみを表す動詞が使われたとしても、日本語の「来る」や

「行く」が表している情報はジェスチャーによって補われていると考えられるということである。また、話し手に中立的な移動の場合、日本語では「行く」のみが許され、フランス語でもallerのみが言語表現としては許される状況であるとき、言語的には日本語の「行く」のみが観察されたが、ジェスチャーレベルでは両言語の間に違いは観察されないという結果であった。つまり、フランス語の言語表現としてダイクシスの表現が少ないのは言語構造の制約によるものであって、認識そのものについては両言語の話者で大きな違いは観察されないと解釈することができる結果である。したがって、ジェスチャーの機能としては(3)がもっとも有力だと考えられ、この結果は、言語表現の違いがただちに認識の違いと等価というわけではなく、言語表現は認識の一部に過ぎないことを示しているということができる。

2つ目の成果は、日本語話者においては言語表現とジェスチャーの間で表現している方向にずれが生じることがあるのに対し、フランス語話者ではそのようなずれが観察されないという事実から、話し手自身の領域を決定するときに、言語ごとに認識上の違いがある可能性を示したことである。日本語話者とフランス語話者の間で決定的な違いが生じたのは、右から左、左から右といった、話し手に中立的な移動方向の描写においてである。両言語の話者は、ジェスチャーによって基本的にはアイコンニックにこの中立的な方向を表現するという点では違いがなかった一方で、日本語話者による言語表現では「行く」と「来る」の使い分けが生じることがあった。これに対し、フランス語では、allerは中立的な移動にも使えるため使用されるケースがあったものの、対立するvenirが使われることはなかった。日本語の直示動詞の使い分けは、たとえば話し手と移動物の間で「閉鎖空間を共有するかどうか」「話し手の視界に入るかどうか」といった観点から説明可能である。すなわち、たとえ物理的な移動方向が中立的であっても、移動のもたらす結果状態が話者と移動物との間に何らかの関係を構築すると捉えるかどうかという点が言語表現を分けていられる。これは、典型的な空間ダイクシスではなく、心理的側面にまで拡張した用法である。この心理的側面は話し手を言語化するvers moiのような前置詞句では表現することができないという特徴を持っており、かつ、フランス語ではvenirの使用も容認されにくいことから、フランス語話者は同様の心理的側面を表現する手段を持っていないと考えられる。さらに、ごく一部の日本語話者においては、この心理的ダイクシスの側面までもも手指の形で表現し分けるケースが観察されたのに対し、このようなジェスチャーの使用はフランス語話者では観察されないという結果となった。

以上の結果を総合すると、日本語話者とフランス語話者の間で、話し手自身の領域を確定する上で認識上の違いがあるという解釈は十分に可能だと考えられる。同じ心理的側面を表現する手段を持っていないことが直ちに認識上の欠落を意味することにはならないが、話し手領域の画定に関する注目度の差という意味では相違があると考えられる。また、ジェスチャーと言語の関係をめぐる理論的問題については、ジェスチャー表現は言語による意味の分節を反映するものであって、ジェスチャーが言語から独立して独自の意味的発達を遂げているわけではないと考えられる。1点目で述べた(3)の機能は、フランス語でも表現しようと思えばできる意味的要素が何らかの理由で言語表現から抜け落ちたとき、ジェスチャーが補えるという例である。しかし、そもそも言語的にも表現する手段を持たない意味に関しては、ジェスチャーでも表現することはできないという可能性がある。最終的な結論を提示するにはさらなる理論的検討が必要ではあるものの、ジェスチャーの機能としては上記の(2)が適合すると考えられるとともに、ジェスチャーを用いても表現することができない意味的領域において、認知言語学における捉え方あるいは事態把握といった観点が有効であることを示唆する結果となった。

3つ目の成果は、類型論におけるダイクシスの位置づけに関する理論的問題に関し、あくまで経路の一部として分析することで従来の類型論を維持しながら、ダイクシスに注目することによって新たな類型論を開拓する可能性があることを提案したことである。中立的な移動において日本語で「行く」と「来る」の使い分けが行われる状況は、移動物と話し手による場の共有や、見えない領域から話し手の視野への進入など、空間的に条件づけられていると解釈することができる状況に限定されている。換言するならば、開放空間のように、共有すべき空間が見当たらない場合や視野に変化がないようなときには、この心理的ダイクシス表現が見られないということである。つまり、ダイクシスは起点や着点に話し手がいるときの特殊な配置に過ぎないという考えがダイクシス表現のプロトタイプを構成するものの、心理的・機能的な用法は、そのプロトタイプからの拡張として、あくまで空間的条件に動機づけられていると捉えることができる。このように考えることで、ダイクシスが経路の一部を構成するという従来の類型論は保持しながらも、ダイクシスを中心とした別の類型論を提案するもできるという結果となった。移動表現の類型論にダイクシスを含める以上、そこには話し手の存在が必ず必要となり、移動を構成する意味的要素として話し手は統合されなければならない。そのとき、従来の類型論を大幅に修正するのではなく、話し手がどの程度、外界事象の描写に統合されるのかという観点から、新たな類型論を構築する可能性がある。

以上の成果に付随して、残された課題も多い。まず1つ目として、話者関与的な移動の表現において、日本語話者とフランス語話者の間でジェスチャーに違いがないことは明らかになったものの、「行く」「来る」と日本語話者によるジェスチャーが同一の情報を余剰的に表現しているだけなのか、それともそれぞれが別の情報を担っているのかという点は明らかになっていない。心理的側面を「私の方に」といった話し手が言語化された表現では表すことができないという性質を考慮するとき、理論的には「私の方に」といった話し手が言語化されている表現とジェスチ

チャー表現が意味的に近く、ダイクシス動詞が表す意味はそれらとは異なると思われる。これは「私の方にやってきた」という表現において、「私の方に」と「来る」が別々の意味を担っていることをどのように証明するのかという問題に等しく、さらなる分析が必要である。

2つ目は、本研究遂行中に新たなダイクシスの用法だと考えられるものが見つかったという点である。たとえば、同じ場面を何度か説明し直すといった実験の状況において、日本語話者においてはジェスチャーが一定でありながら、「行く」と「来る」が交互に入れ替わることがあった。このダイクシス動詞の使い分けは基準物の形状や移動物の空間的配置といった物理的要因では説明できない。ジェスチャーを引き出すために2人1組で実験を行ったことにより、談話構成上の理由によってダイクシス動詞の転換が起こっている可能性があり、このようなディスコースレベルにおける日本語とフランス語のダイクシス動詞の意味論・語用論的な相違、それに付随する認知言語学的な捉え方の問題の相違など、さらなる類型論的研究が必要となる問題が見つかった。

最後に、本研究では中心的な分析対象とはしなかったが、先行研究での報告とは異なるジェスチャー実験の結果が得られた側面もある。トルコ語は類型論的には日本語と類似していることが期待されるのだが（移動表現の類型論においてフランス語も同一類型だが、膠着語という点では日本語とトルコ語の方がより類似している可能性が高い）、トルコ語のジェスチャー実験では様態が頻繁に表現されることが報告されている。本研究での実験では、日本語でもフランス語でも言語ではある程度の様態表現頻度が確認されたものの、ジェスチャーで様態を表現する被験者はほとんどいないことが観察されている。同一類型に分類される言語間でこのような違いが観察される原因についてはさらに追究する必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 守田貴弘 (2017) 「分析の粒度と理論言語学」『フランス語学研究』第51号. 65-71.
2. Morita, Takahiro. 2016. Event Segmentation in Motion and Caused Motion Events in French. Papers from the 16th National Conference of the Japanese Cognitive Linguistics Association, 16, 115-127.

〔学会発表〕(計7件)

1. Morita, Takahiro. 2019. Motion Event Descriptions in French. Motion Event Descriptions across Languages, NINJAL, Tokyo.
2. Morita, Takahiro. 2019. Cross-linguistic constructional variations in the expression of manner of motion. Motion Event Descriptions across Languages, NINJAL, Tokyo.
3. Morita, Takahiro. 2018. Deixis en japonais et définition du « domaine du locuteur : une comparaison au français ». Conférence invitée au CRLAO, Paris.
4. 守田貴弘 (2018) 「フランス語移動表現における経路表示と類型論」日本言語学会第157回ワークショップ「移動経路の種類とそのコード化：通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」(企画・司会：松本曜), 京都大学.
5. 守田貴弘 (2018) 「ダイクシスは経路の一部なのか? 心理的・機能的用法と移動以外のマクロイベントからの検討」Prosody and Grammar Festa 2, 国立国語研究所.
6. Morita, Takahiro. 2017. Deixis and Semantics of *Construal*: An experimental study in Japanese and French. International Cognitive Linguistics Conference, Tartu, Estonia.
7. Morita, Takahiro. 2017. How to integrate the notion of “speaker” into the motion typology? From “representation” of physical events” to “linguistic reconstruction” of perceived events. Neglected Aspects of Motion Event Descriptions. ENS, Paris.

〔図書〕(計2件)

1. 守田貴弘 (2017) 『捉え方』の意味論 青木三郎 (編) 『フランス語学の最前線』第5巻, ひつじ書房, 31-67.
2. 守田貴弘・石橋美由紀 (2017) 「日本語とフランス語の移動表現-話し言葉と書き言葉のテキストからの考察」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』くろしお出版, 275-302.

〔その他〕(計2件)

1. (招待講演) Morita, Takahiro. 2018. Deixis en japonais et définition du « domaine du locuteur » - Une comparaison au français -. CRLAO, Paris.
2. (招待講演) Morita, Takahiro. 2018. Recherches de langues dans une perspective typologique : un cas de l'expression spatiale en japonais et en français. INALCO, Paris.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。